

小川未明作

# 月夜と眼鏡

朗読 飯田明子

第一卷 2. 小川未明「月夜と眼鏡」



小川未明（おがわ みめい）

1882年（明治15） - 1961年（昭和36）。新潟県高田市生まれ。

早稲田大学英文科卒。学生時代から小説を書きはじめ、処女作「紅雲郷」が坪内逍遙に認められ、作家として世に出る。卒業後は「少年文庫」「読売新聞」などの記者をしながらロマンチズムの作品を発表。一方、1910年には第一童話集「赤い船」

出版、以後小説と童話の両方を書いたが、26年、「今後は童話作家に」と題する有名な宣言を発表、決意通り生涯童話一筋の道を歩んだ。それは「童話という形式が、自分のロマンティックな情感を表現するのに、最も適切であると思った」からだという。未明の童話は、初期の「ネオ・ロマン主義」、大正期の「人道主義」、昭和から戦後の「生活主義」と大別して三つの足跡を持つと言われるが、その本質は物語の展開というより、イメージの連続による世界で、いわば詩的メルヘンともいうべき特色が強かったといわれる。

月夜の晩、針仕事をしていたお婆さんは、やってきた眼鏡売りから眼鏡を買う。夜がふけてやすもうとすると、今度は指をけがして女の子がやってくる。だが、その子は美しい胡蝶に変わり、いつの間にか姿を消す。「月夜と眼鏡」は未明が描く“月夜のまぼろし”であろう。発表は1922年（大正11）。

町も、野も、いたるところ、みどり 緑の葉につつまれているころでありました。

おだやかな、月のいい晩ばんのことです。しずかな町のはずれにおばあさんは住んでいましたが、おばあさんは、ただひとり、まど 窓の下にすわって、はり 針しごとをしていました。

ランプの火が、あたりを平和に照らしていました。おばあさんは、もういい年でありましたから、目がかすんで、針のめどによく糸が通らないので、ランプの火に、いくたびも、すかしてながめたり、また、しわのよった指さきで、ほそい糸をよったりしていました。

月の光は、うす青く、この世界を照らしていました。なまあたかな水の中に、こたち 木立も、おか 家も、おか 丘も、みんなひたされたようであります。おばあさんは、こうしてしごとをしなから、自分のわかいじぶんのことや、また、遠方のしんせきのことや、はなれてくらし

いる孫まごむすめ娘のことなどを、空想していたのであります。

目ざまし時計の音が、カタ、コト、カタ、コトとたなの上できざんでいる音がするばかりで、あたりはしんとしずまっています。ときどき町の人通りのたくさんな、にぎやかなちまた巷の方から、なにか物売りの声や、また、汽車の行く音のような、かすかなとどろきがきこえてくるばかりであります。

おばあさんは、いま自分はどこにどうしているのかすら、思いだせないように、ぼんやりとして、ゆめをみるようにおだやかな気持ですわっていました。

このとき、外の戸をコト、コトたたく音がしました。おばあさんは、だいぶ遠くなった耳を、その音のする方にかたむけました。いまじぶん、だれもたずねてくるはずがないからです。きつとこれは、風の音だろうと思いました。風は、こうして、あてもなく野原や、

町を通るのであります。

すると、こんどは、すぐ窓の下に、小さな足音がしました。おばあさんは、いつもに  
ず、それをききつけました。

「おばあさん、おばあさん。」と、だれかよぶのであります。

おばあさんは、さいしよは、自分の耳のせいではないかと思いました。そして、手を動  
かすのをやめていました。

「おばあさん、窓<sup>まど</sup>をあけてください。」と、また、だれかいいました。

おばあさんは、だれが、そういうのだろうと思つて、立つて、窓の戸をあけました。外  
は、青白い月の光が、あたりをひるまのように、明るく照らしているのであります。

まど<sup>せ</sup>の下には、背のあまり高くない男が立つて、上をむいていました。男は、黒いめが

ねをかけて、ひげがありました。

「私はおまえさんを知らないが、だれですか。」と、おばあさんはいいました。

おばあさんは、見知らない男の顔を見て、この人はどこか家をまちがえてたずねてきたのではないかと思いました。

「私は、めがね売りです。いろいろなめがねをたくさん持っています。この町へは、はじめてですが、じつに気持のいいきれいな町です。今夜は月がいいから、こうして売って歩くのです。」と、その男はいいました。

おばあさんは、目がかすんで、よく針のめどに、糸が通らないでこまっていたやさきで、  
ありましたから、

「私の目にあうような、よく見えるめがねはありますかい。」と、おばあさんはたずねまし

た。

男は手にぶらさげていた箱のふたをひらきました。そして、その中から、おばあさんにむくようなめがねをよっていましたが、やがて、一つのべっこうぶちの大きなめがねを取り出して、これを、窓から顔を出したおばあさんの手にわたしました。

「これなら、なんでもよく見えることうけあいです。」と、男はいいました。

窓の下の男が立っている足もとの地面には、白や、赤や、青や、いろいろの草花が、月の光をうけてくろらずんで咲いて、におっていました。

おばあさんは、このめがねをかけてみました。そして、あちらの目ざまし時計の数字や、  
こよみ

暦の字などを読んでみましたが、一字、一字がはつきりとわかるのでした。それは、ちようど、いく十年前の娘のじぶんには、おそらく、こんなになんでも、はつきりと目にう

つったのであろうと、おばあさんに思われたほどです。

おばあさんは、大よろこびでありました。

「あ、これをおくれ。」といって、さっそく、おばあさんは、このめがねを買いました。

おばあさんが、お金をわたすと、黒いめがねをかけた、ひげのあるめがね売りの男は、たち去ってしまいました。男のすがたが見えなくなったときには、草花だけが、やはりもとのように、夜の空気の中におっていました。

おばあさんは、窓をしめて、また、もとのところにすわりました。こんどはらくらくと針のめどに糸を通すことができました。おばあさんは、めがねをかけたなり、はずしたりしました。ちょうど子どものようにめずらしくて、いろいろにしてみたかったのと、もう一つは、ふだんかけつけないのに、きゆうにめがねをかけて、ようすがかわったからであり



ました。

おばあさんは、かけていたためがねを、またはずしました。それをたなの上の目ざまし時計のそばにのせて、もう時刻もだいぶおそいからやすもうと、しごとをかたづけにかかりました。

このとき、また外の戸をトン、トンとたたくものがありました。

おばあさんは耳をかたむけました。

「なんというふしぎな晩だろう。また、だれかきたようだ。もう、こんなに……。」と、おばあさんはいって、時計を見ますと、外は月の光に明かるいけれど、時刻はもうだいぶふけていました。

おばあさんは立ちあがって、入り口の方に行きました。小さな手でたたくとみえて、ト

ン、トンというかわいらしい音がしていたのであります。

「こんなにおそくなってから……。」と、おばあさんは口のうちでいいながら戸をあけて見ました。するとそこには、十二三の美しい女の子が目をうるませて立っていました。

「どこの子かしらないが、どうしてこんなにおそくたずねてきました？」と、おばあさんはいぶかりながら問いました。

「私は、町の香水製造場こうすいせいぞうじょうにやとわれています。毎日、毎日、白ばらの花からとった香水をびんにつめています。そして、夜、おそく家に帰ります。今夜も働はたらいて、ひとりぶらぶら月がいいので歩いてきますと、石につまずいて、指ゆびをこんなにきずつけてしまいました。私は、いたくて、いたくてがまんができないのです。血が出てとまりません。

もう、どの家もみんなねむってしまいました。この家の前を通ると、まだおばあさんが起

きておいでなさいます。私は、おばあさんがごしんせつな、やさしい、いいかただという  
ことを知っています。それでつい、戸をたたく気になったのであります。」と、髪かみの毛の  
長い、美しい少女はいいました。

おばあさんは、いい香水のにおいが、少女のからだにしみているとみえて、こうして話  
しているあいだに、ぷんぷんと鼻にくるのを感じました。

「そんなら、おまえは、私を知っているのですか。」と、おばあさんはたずねました。

「私は、この家の前をこれまでたびたび通って、おばあさんが、窓の下で針しごことをなさ  
っているのを見て知っています。」と、少女は答えました。

「まあ、それはいい子だ。どれ、そのけがをした指を、私に見せなさい。なにか薬くすりをつ  
けてあげよう。」と、おばあさんはいいました。そして、少女をランプの近くまでつれてき

ました。少女はかわいらしい指を出して見せました。すると、まっ白な指から赤い血が流れていました。

「あ、かわいそうに、石ですりむいて切ったのだろう。」と、おばあさんは、口のうちでいいましたが、目がかすんで、どこから血が出るのかよくわかりませんでした。

「さつきのめがねはどこへいった。」と、おばあさんは、たなの上をさがしました。めがねは、目ざまし時計のそばにあつたので、さつそく、それをかけて、よく少女のきず口を、見てやろうと思いました。

おばあさんは、めがねをかけて、この美しい、たびたび自分の家の前を通ったという娘の顔を、よく見ようと思いました。すると、おばあさんはたまげてしまいました。それは、娘ではなく、きれいな一つのこちようでありました。おばあさんは、こんなおだやかな月

夜の晩には、よくこちようが人間にばけて、夜おそくまで起きている家を、たずねることがあるものだという話を思いました。そのこちようは足をいためていたのです。

「いい子だから、こちらへおいで。」と、おばあさんはやさしくいいました。そして、おばあさんはさきに立って、戸口から出てうらの花園はなぞのの方へとまわりました。少女はだまつ

て、おばあさんのあとについて行きました。

花園には、いろいろの花が、いまをさかりと咲いていました。ひるまは、そこに、ちようや、みつばちが集まっています、にぎやかでありましたけれど、いまは、葉かげでたのしいゆめをみながらやすんでいるとみえて、まったくしずかでした。ただ水のように月の青白い光が流れていました。あちらのかきねには、白い野ばらの花が、こんもりとかたまつて、雪のように咲いています。

「娘はどこへ行った？」と、おばあさんは、ふいに、立ちどまってふりむきました。あとからついてきた少女は、いつのまにか、どこへすがたを消したのか、足音もなく見えなくなっていました。

「みんなおやすみ、どれ私もねよう。」と、おばあさんは行って、家の中へは行って行きま

した。  
ほんとうに、いい月夜でした。